

子どもの質的行動観察はどう生かされたか： 人は文脈の中で生きるという自覚

秦野 悦子（白百合女子大学）

日誌研究会の時代

25年前のことです。当時20歳代後半の「海の物とも山の物ともつかない」人たちが、日誌研究という共通のテーマをもって、その中でみえてくることを形にしたいと、各自が思索を深めていました。身近な事例参与観察を行なう中で、人間の発達についてみえてくる事実は多く、その表現方法を模索していた時期でした。徹底したフィールドワークによってしかみえてこないものを、何とかつかみ出したいというわくわくした気持ちが、仲間によって支えられているという感覚でした。「こういう視点は、面白い」と思う人が自分以外にいたり、自分が思いを巡らしていたことと、同じようなことを考えている人たちに会い、勇気を得たという気持ちがしました。

日誌研究会の時代に、大げさにいえば、メンバーのそれぞれは、翌年の身分がどうなっていくのかが不安定であるという点で長期的な研究生活の保障のない、いわゆる人生の移行期でした。メンバーは大学院生から、助手、研究員、講師と社会的肩書きが変わり始めた頃でしたが、皆さんよく論文は書いていましたね。心理学評論、教育心理学研究、紀要など、メンバーの執筆した論文の合評会で、新たな視点が見えてきて、目から鱗が落ちる思いでした。

また自分の日誌データの分析や解釈の検討などで得た視点は、論文をまとめるにあたり、構成の軸となりました。データから論文にしていくなプロセスを、この会で深めていったことが私にとって大きな力となっています。東京、

名古屋、大阪と会場をもちまわりしながら、議論を積み重ねてきた会でした。

遡及的未来志向

日誌研究会時代の「炎のような想い」は封印されることなく、研究生生活の着火点としてメンバー個々の研究生生活や職業人生の中で「ともしび」として燃え続けてきたようです。そして25年経た今、「未来の歴史を創る」という趣旨で、日誌研究会の歴史が掘り起こされました。歴史とは過去から積み上げてくるものではなく、未来から過去への宝探しです。歴史上の人物は刻々と動く時間の中にあって、歴史として自分自身を客体化することはないのですが、時が経て、自分自身を歴史上の人物として遡及的に位置づけ、未来の展望を試みてみます。日誌研究会の時代に取り組んだことが、そのあと現在まで、どんなふうにつながっているのかを見直してみます。

日誌研究会のメンバーは、自分のことばをもっていた人たちでした。研究会では、私はこういうことを言いたかったのだろうということを、誰かがことばにしていました。ですから、その言葉の上ののって私も自分の考えを深めることができました。夜空の星を見上げたときに、探せなかった星座の見つけ方を知ったときのような気持ちです。満天の夜空がただ美しいだけではなく、壮大なストーリーと意味があって、法則を知っている人には見えてくる世界があるということです。

今につながる観察：コミュニケーションを支援する

タッチパネル式療育ソフトの開発

図1は、現在行っている研究のひとつをあらわしたもので、コミュニケーションを支援するタッチパネル式療育ソフトの開発です。この画面のいくつかは、画面のコンテンツ、また何枚かの写真は子どもとセラピストとのやりとりを写したものです。私の研究室で担当しているのは、①発達心理学的視点からコンテンツ内容評価をして、その質を高めていくための基礎資料を提供、②ソフトを使用した療育評価の実証的研究です。子どもさんの目の前にタッチパネルがあります。このタッチパネル式のコンテンツを使って、人が

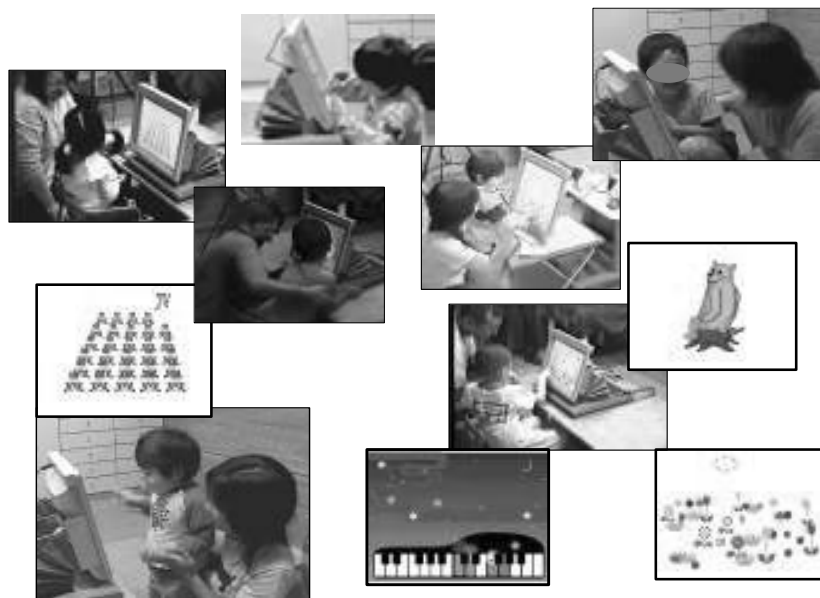


図1 コミュニケーションを支援するタッチパネル式療育ソフトの活用画面

どういうふうにかかわっていただけるのかを障害のあるお子さんと療育者との関わりを基礎データとして、分析を始めています。療育者にとっては、ある限定された状況で、どこまでかかわりの難しいお子さんとコミュニケーションを取れるかの挑戦です。観察者にとっても、療育者がどのように子どもとのやり取りを意味づけていくのかの読み込み作業です。

文脈と出来事の関係を記述する

日誌研究会時代に得たことは、「徹底的に文脈と出来事の関係性を記述していく」ことでした。観察で人の行動や態度を解釈して行く時、その人がどんな意図を持っているかということは文脈を抜きにしては語れません。それが行動の前後の文脈であったり、その人の過去の類似体験という個人的な歴史文脈であったりしますが、そういうことも含めて、文脈を徹底的にみつめて

いくことでした。

日誌研究会に参加してメンバーと議論する中で得たことで一番大きいことは研究への根気とエネルギーだったと思います。日々の記録は研究者という眼をもって、親という生活者としての参与的かかわりをもって、記録を書いていきました。乳幼児の日常を書くという作業は、その瞬間と前後の経緯さえ逃さなければ、それほど難しいことはありません。が、そこを逃してしまうと、数時間後に思い出そうとしてもその事実だけは書いても、生き生きした詳細を表すことはできません。

たまっていく記録を、どういうふうに処理していけばいいのか、どういうふうにまとめていけばいいのか、面白いと思う現象は山のようにあるのだけど、これを何らかの形として結果を表すことができないかと考え、思いを巡らせていました。現在のような質的研究の方法論が進んでいなかったという時代的制約もありました。日誌研究会のメンバーは、緻密に物事をとらえていく方ばかりだったことも影響しているのかもしれませんが、カード化する、番号化するとかデータベース化すること、恣意的でない形で集めたデータを意味づけていくという気の遠くなるような作業をこつこつとしておられました。そんなメンバーの気迫に、自らの気持ちを奮い立たせながら、このことを徹底的にやっていました。皆さん、かなり緻密に文脈を含んだデータをとっておられたのですが、私も自らの気持ちを励まししながら、煩雑さにめげないように、緻密にデータ収集をすること、ボトムアップ的なデータ整理の仕方を探っていくことを、数年間、学んだといえます。研究生活の中では、それは長くない期間であったはずですが、とても貴重な期間でした。

日誌観察がとらえるデータの質

仮説生成型研究におけるデータの質について述べたいと思います。当時、日誌観察データを用いて2本の審査論文を書きました。「指差し研究の発達の意義」と「前言語期から言語期における否定表現の発達」です。両論文とも日誌データを資料とした期間は、乳児期前半から2歳後半までであり、対象とした子どもが、ヒトとのやり取りを広げる社会的基礎として、「聞き手

効果段階」から「意図的伝達段階」を経て「言語の段階」へと至る時期であり（Tomassello, M. 1999）、日誌観察が最も効果的に生きてくる発達年齢時期であったといえます。

論文の合評会で、ある人から「もともとこういう仮説があって、そういうデータだけをとってまとめたものですか。」と質問されました。この質問の意図としては、必要なデータが過不足なく収集されているか、データの偏りはないか、恣意的なデータということはないかという率直な問いかけだと受け止めました。

観察記録は、観察を積み重ねるという経過の中で、研究の軸となるのがみえてくることにより、さらにそこを重点的に記録するようになります。私の場合は、人間が育っていくことに会う中で、その中で面白かった、新しかった、今までになかったことをなるべく記述していくという作業を重ね、それがある程度の量に達した時、「指さし」という軸でみえてくるプロセス、「否定表現」という軸でみえてくるプロセスを観察記録データから、再構築していきました。

意味づけ論

日誌研究の中で個人史がすべて語られるわけではないのはもちろんです。このような生活参与観察記述の方法でとらえられるデータの特徴をあげてみると、新奇事象や行動の初出は、かなり確実にとらえ、その初期駆動のプロセスをとらえることには適しています。一方、日常的に高頻度に生じて習慣化しているような行為は、注目されにくいといえます。ただ、生活の中でルーティン化した行動は、異なる文脈で不適切な過剰般化がみられた場合は、記述されやすいという特徴を備えています。

観察研究の醍醐味は、観察してみえてくる、分析の軸を持つとみえてくる、データ分類作業でみえてくる、分析解釈のなかでみえてくる、そのみえてくる内容が明確になり、深化していくときに味わう感動です。観察者自身が分析をしていくプロセスの中で、子どもをより深く理解していくという意味で、新たな子どもを発見し、子どもと新たに出会いなおしているのだといえます。

そこで身につけてきたことは「意味づけ論」です。コンテキストとテキストの関係の分析と申しましょうか、文脈の中で、行為や発話をどのように意味づけていくかが、問題やテーマの設定のしかたで異なってきます。文脈とは発話や行為を関係性の中で理解していくための「意味づけ論の」立役者です。文脈を読む、文脈から関係性を読む、文脈から発話や行為を読む、ということ徹底して、ある時期に行っていたといえます。

子どもの行動の質的観察

「子どもの質的行動観察——人は文脈の中に生きる」という視点で質的に行動をみていくことは、そこに参加している者、つまり当事者自身が、実は深く他者理解をおこなうというプロセスそのものであるということを、現在、たずさわっている研究を取り上げて述べてみます。

コミュニケーションを支援するタッチパネル式の療育ソフトを使用した療育評価の実証的研究では、モノを与えれば子どもは育っていくというのではなくて、モノがあった時、子どもにどういうふうに出会わせていくのか、どういうふうにかかわらせていくかという介在者（ここではコミュニケーション・パートナーと言っています）の位置づけ、文化の伝達者の位置づけが、どうあったらいいかという基礎データを分析しています。ここでの介在者はセラピストですが、親であったり、保育者であったりします。今日はセラピストの人たちが、子どもとかかわりを持つ中で、どのようなことに気づき、どのような自分自身の意識の変化が起こってきたのかをお伝えします。

また、人との共生をめざしていくペット型ロボットに子どもたちがかわかっていく時、介在者（ここではアイボマスターと言っています）が、子どもに対して、どのように新しいモノと出会わせていくのかということとも通じるものとしてとらえています。

整理しますと「子どもの行動の質的観察というアクション・リサーチにおける当事者自身の語りから、支援者が子どもとの関係を再構築するプロセスが行われた」といえます。



図2 ペット型ロボットと幼児のかかわり

「わかっていること」と「実際に行うこと」とは違う

子どもの発達支援、子育て支援にかかわる際の現実として、親や保育者など支援者が、「この子にはこうかかわってあげた方がいい、こんなふうにしていった方がいい」ということと、それが「今、自分がその子に対してできるか」というとの間には落差があります。一般に子育てにかかわる親が、子育て期に抱く気持ちはこんなものかもしれません。

さまざまな要因がくみ合わさって日常生活が営まれていく時に「知っていること」、すなわち「どういうふうにかかわればいいか」という知識、「こういうふうにやったらうまくいく」という経験、「こんなふうに育ってほしい」という願いが合体して支援者はかかわっていきます。むしろ知識や技術はいろいろ経験を通して学ぶことができるけれども、「自分はその子どもをどういうふうに見ていくのか、自分はその子どもにどう対峙していくのか、どんなふうに子どもとの関係を意味づけていくのか」という意識が明確でない限りは、発達支援がうまくいかないだろうと思われます。

この部分で、日誌観察研究での参与観察者の視点と通じるものがあります。まさに今、日々生活をともしている人が、生活をともしている場所の特徴を生かし、そこに一緒に参加する中で子どもの行動を意味づけていく営みの重要性です。

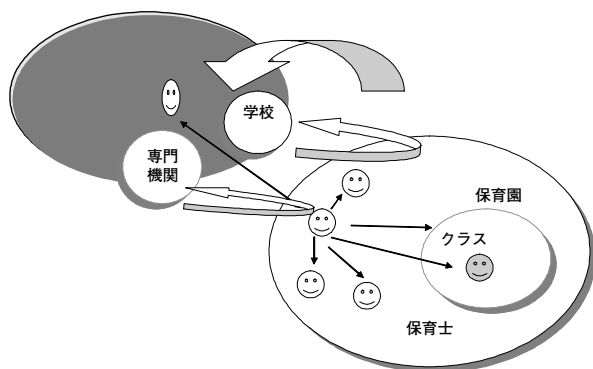


図3 支援者の活動参加という視点

発達支援で支援者がどうあったらいいかというポイントは、日々の子どものやりとりの中での困難さをとらえていくこと、支援者のスタンスを明確にすることです。そのためには自分が支援者としてどうありたいか、子どもとどのような関係性を持ちたいかというような文脈を含めた「他者理解」がなければ、うまくいかないだろうということです。「参加」というところでは、まさに私たちは子どもと接する時、教育、保育の中でどうやって参加していくのか、活動とか参加に向けての基礎的なものをしっかりと理解していきたいということです。そのイメージを図3に示しました。支援者が一人の子どもにかかわる時には、ただ子どもとの関係だけではなく、クラスの関係、園その関係、生活の関係を含みこんでいるというイメージです。

観察者と当事者の文脈の読み取りの違い

質的観察では、子どもにかかわった当事者の意図や感情を確認することで、さらに観察状況の読み取りが深まることがあります。観察者と当事者の状況の読み取りの違いは、これは観察していく上で重要だと思われるので紹介します。

タッチパネル式療育ソフトで、セラピストUさんは、他者への明確な反応がほとんどみられない最重度知的障害幼児にたいして、その子どもが「ああ」

たとえば、そのまま模倣して「ああ」と返してみるというかわりを、非常に丁寧に繰り返すという対応をしておられました。ビデオ分析をしている観察者は、U先生がほんとうに辛抱強く、丁寧に、ゆっくりとした子どものタイミングに合わせて繰り返し対応しておられるなあと、何度見ても頭の下がる思いがするほどでした。しかし、あとでU先生に話を伺うと「まだまだ、自分自身は過剰な言葉かけがある。また自分の行動の動き出しの早さがあると感じる。もっともっと、子どものタイミングを待って、子ども自身にモノに気づかせ、行動が促されるというようなことをもっと気をつけたい。」と言っておられました。

ここで、セラピストが行っているのは、観察者が映像を見続けているだけでも根気のいるほど、辛抱強い、丁寧なかかわりなのですが、当事者であるセラピスト自身は「まだ、かわりを待つ必要がある」という自覚をしています。観察者と当事者の間には、子どもへのかかわりについての文脈の意味の読み取りのずれがあるといえます。当事者は「語り」の中でどのようにそれを表現しているのかを例をあげてみましょう。

当事者の語りによる子どもへの気づき

セラピストMさんが、自閉症のお子さんに対して、隔週1回ずつタッチパネル式の療育ソフトを取り入れ2～3か月たった時に、子どもとのかかわりの中で新たな気づきがあったと次のように言っています。

Mさん「セラピスト自身が療育ソフトの内容や使い方に慣れていなかったこと、子どもが何に興味を示すのかがわからなかった。模索状態でした。少し慣れてきて、また子どもさんが何を好むか、わかってきたため、声かけの仕方など決まったパターンでやりとりができるように意識しています。興味あるものを一人でやるだけでなく、子どもとやりとりして、どう展開できるか、また興味のないものにも目を向けるには、どう働きかけたらいいか、今後の課題です。」

この療育ソフトを取り入れる半年以上前から、セラピストMさんは、この

お子さんの通常の個別療育もおこなっています。しかし次のような発言から、この活動を通してMさんが、子どもと相互的関係の出会いなおしをしているのだなということが分かります。

Mさん「決まった課題を繰り返すことで、これが終わったら個別の支援をするという見通しがついてきたように思います。言葉のやりとりをするきっかけは、コミュニケーションソフト以外にも増えてきているようです。ただここで気がついたことは、もともと反応の低いお子さんだったのですが、こちらの言うことも聞いてないようで聞いていたのだなと感じることもあります。限られたところでやりとりしていくので、日常生活の中では子どもさんが聞いているのか、聞いてないのかわからない。反応しているのか、していないのかわからない。ただこのようなセットされた状態の中で繰り返しやっている中で、子どもさんに対して新たな気づきを持ってきております。」

引き続き、セラピストSさん、Iさんの語りを紹介しましょう。語りの中で述べられていること、そのままなのですが、特定の子どもと特定の場面で、繰り返ししかかわって試みてみえてくることがあるということ、その関係性がこの療育ソフトを使った活動の時だけでなく広がってきているということです。じっくりと他者と楽しい時間を過ごす経験は、日常のその人との関係も豊かにしていく、誘うとスッと乗ってくるように確かなものになってくるようです。療育者が、特定の子どもとの関係を徹底的に意識化することによって、療育者自身、子どもの見方が変わってきているということです。

Sさん「子どもとの遊び場面で自分が何をしようとしているのか見つけ直す機会になったと思います。私は子どもが体験し、感じていることに思いをめぐらし、受け取ったことを子どもに伝えて、お互い共鳴しあうような瞬間を体験したいと思っています。今回の子どもに対しては、子どもが理解できる言葉、音、動作を使って、コンテンツの中で、子どもが面白みを感じる部分にかかわれるような仕掛けをたくさん仕込んでおいて積極的に働きかけてみます。はじめは反応がなかったり、拒否もされますが、回数を重ねるうちにセラピストのかかわりに面白みを感じるようになることが多くあり、繰り返

されることに理解ができる、発見できるということが、モノとの遊びや、コンテンツへのかかわりだけではなく、セラピストの中でも見られることを再発見しました。」

I さん「普段の指導ではセラピストから子どもへ働きかけることが多く、子どもの反応をじっくり待つことが意外と少ないと思った。待つという姿勢で子どもの様子を見てみると、ちょっとした視線の動きや表情などの部分的変化、肢体不自由の子どもだと、ちょっとした手の動きに気づくことができる。よい経験ができた。それとともに普段、いかに子どもの小さな反応を見逃しているかがわかった。」

彼らは日々、セラピストとしてこの子どもたちに個別の支援をしています。その人たちが療育ソフトを利用して、子どもに意識的にかかわることでさまざまな洞察を得たことが、こんなに多くあったということです。このやりとりの中で、子どもに合わせた場の設定をどういうふうにしていくかを意識することができたということです。「話しかけて理解ができたかどうか、表現できない子どもに対して、わかっているだろうと予測した上で言語を使用している自分に気づきました」というようなことも指摘されました。参加観察する中で子どもとの新しい出会いが見えてきています。

「語りによるセラピストの気づき」を整理しますと、日常の療育とコミュニケーションソフトとのかかわりの質が違うということです。セラピスト自身が子どもとのかかわり方を再発見したことです。これまで気づかなかった子ども理解をさらに深めたということになります。意識的にかかわる、意図的にかかわることによって自分の枠組み、相互的な関係の中で、子どもとのやりとり、意味のとらえ直しをして、結果として豊かなコミュニケーションに向けてのかかわりが進んだということになります。

一見、日誌研究とどういう関係があるかと思われる方もいるかもしれませんが、当事者が子どもとともにある日常に参加する中で、相手を理解しよう

としてかわることによってのみ、深まる子ども理解があります。これが日誌研究の際と同様に、当事者がかわりながら相互的に変化していく過程の中で「他者を理解していく」という一つの手法になっていくのではないかと思います。

当事者による発達支援の意味の再構築

参与観察の過程は、結果的にセラピストにとっての支援の意味を再構築するプロセスそのものです。つまり、支援者は、参加して、観察して、子どもと出会い直して子どもを再発見し、支援者自身がどうあったらいいのか、どうありたいのかを再構築していきます。支援者は、子どもへの支援目的を明確にして、コミュニケーション支援の基本的構造をとらえ直していきます。「ニーズのある子どもと支援者との共感的な関係の構築」が支援のポイントだと、再認識してきます。

皆、ここに参加している発達支援センターのセラピストはベテランの支援者の方ですが、あらためて徹底的な他者理解が、支援のポイントであるということを再認識しています。自発的介入の少ない子ども、他者への関心の低い子ども、反応が読み取れない子どもの場合、子どもの側からの反応を待つことなく、過剰な言葉かけ、動きだしのはやさに自分自身、気づいたということがあります。それらがおそらくこれから子どもさんと当事者としてかわっていく中で、療育的教育のかかわりの質の向上につながっていくのだろうということです。

最後のメッセージとして、私たちが当事者として参加し、観察し、他者を方向づけていったり、他者と活動を共有することによって、子どもが人に向かいかわるのか、どのように情動教育をしていくのかという橋渡しをする支援者、介在者、コミュニケーション・パートナー、伝達者を、もっと子どもの生活文脈の中に位置づける必要があるだろうと思っています。

〈質疑応答〉

サトウ どうもありがとうございました。秦野さんはどういうきっかけで日誌研究会に入ったか、思い出せませんか？

秦野 日誌研究会は、やまださんが声かけをしてくださったものです。やまださんの本や論文はすでに読んでいましたから、日誌研究会以前に面識があったかは定かではありません。麻生さんは、この研究会で知り合いました。綿卷さんとは大学院の修士を終わった頃に、どの学会で発表しても、いつも同じ発表セッションだったという、最も初期の学会仲間です。ちょうど同じような時期に日誌研究という形で記録を始めた時に、声をかけてくださって、そこにかかわって力強く学ばせていただいたという記憶がございます。

サトウ ありがとうございました。